人間文化創成科学論叢　第11巻　2008年

中国都市部の中年期夫婦にみる情緒関係

――中年期の二つの世代の比較を通して――

于　　建　明*

The Emotional Relationships of Middle-aged People of an Urban Region in Contemporary China

A Comparison of Two Generations

YU Jian Ming

abstract

The purpose of this paper is to discuss the effect of the social transition of China and the norms on the marital emotional relationships in Chinese urban region. Based on the interview to the two groups at the age of 35-45 and 55-65 respectively, the research analyzes the difference between the two generations with the aim to find out the effect of the social transition. By focusing on the dimension of behavior and awareness, it is found that the generation at the age of 35-45 attaches less importance to marital behavior。The main cause is due to the fierce competition during work originating from market economy and the great attention paid to the education of children. On the other hand, this generation attaches relatively more importance to whether affection exists in their marriage, but they don't exhibit their affection actively by words or actions. The generation at the age of 55-65 neither attaches importance to marital behavior, nor to marital emotion when they were young, but this situation might be changed when their children have grown up or when they retired.

Key words: social transition, norms, emotional relationships, affection, two generations

Ⅰ．研究目的

本稿は、中国都市部に居住する中年期夫婦の情緒関係に焦点を当て、中年期の前期及び後期の２つのサブグループの比較を通して、社会変動に伴う社会意識、社会規範の変化が夫婦関係に及ぼす影響の一端を明らかにすることを目的とする。すなわち本稿では、夫婦関係や家族のあり方などの私的な人間関係も、全体社会の変動と無関係ではないという想定をおいている。それは個人の生活史や家族変動を社会の歴史と結びつけて理解しようとするライフコース論のアイディアに通じるものである。

中国における夫婦関係に関する研究は、女性の家族内地位に焦点を当て、家事分担と勢力関係に関心をおくものが多い。情緒関係に焦点を当てる研究は、夫婦の会話における話題と夫婦の関係性を論じたいくつかの研究（杨，2006：潘，2002）に限られている。家事分担に関する研究では、夫と妻の平等性は比較的高いものの、妻がより多くを分担しているという結論が一般的である（陶，1993：沙，1995：徐，1998：潘，2002：杨，2006

キーワード：社会変動、規範、情緒関係、愛情、中年世代

＊平成18年度生　人間発達科学専攻

など)。この内、徐（2004）は、多くの家事を分担している妻の家事分担満足度は必ずしも低いわけではないことを見出した。また夫婦の勢力関係について考察した鄭（2004）は、意思決定尺度により測定される客観的勢力関係は夫優位であるのに対して、主観的評価においては夫婦が互いに対等とみなす意識が強いと結論づけている。これらの一見矛盾する傾向は、「情緒構造は役割構造や勢力構造の背後にあって、それらの安定に寄与している」（望月，1997）という指摘に照らして再検討する必要がある。

また、これらの研究はいずれも、構造機能主義的な立場からの家族関係、夫婦関係の把握を指向しており、歴史変動と夫婦関係のありようの関連を問うものではない。中国ではいまだライフコース研究は欧米の研究の紹介段階に過ぎず、その意味で本稿は、中国の夫婦関係にライフコース・アプローチを適用する試行的な研究として位置づけられる。

Ⅱ．課題設定の背景

1949年の中華人民共和国の成立後、中国では、激しい社会変動に伴って家族のあり方やこれを規定する社会意識、社会規範も変化し続けてきた。中華人民共和国の成立までは、「男尊女卑」「女性の三従四徳[(1)]」を強調する伝統的な家父長制規範が主流であった。それに呼応して、「結婚とは家と家との結合」（若林，1996）とされ、家族様式は「前近代的」な制度としての家族であった。中華人民共和国の成立により家父長制規範の影響が弱まり、それに取って代わったのは社会主義国家体制のもとで強調される集団主義意識であった。以来長期にわたり、中国では性別の差異も否定され、国家への奉仕が最優先される文化の下で（王，2005)、男女ともに家族役割や家族責任を遂行することは二の次にならざるを得なかった。家族関係において「前近代」から男女役割分業を特徴とする「近代」へという一般的な趨勢と異なる傾向を示した。

しかし、80年代以降の改革開放政策、市場経済の導入により、中国社会は「『前近代的』『近代的』『ポスト近代的』な諸要因の中で、『圧縮された近代化』や『現地化された近代化』など『複数の近代』を経験し」（首藤，2008)、家族関係においても、西欧的な「近代家族」の愛情規範が浸透するようになった。落合（1994）のいう「近代家族」の特徴である「家内領域と公共領域との分離」「家族構成員相互の強い情緒的関係」「子ども中心主義」「男は公共領域・女は家内領域という性別分業」「家族の集団性の強化」「社交の衰退とプライバシーの成立」「非親族の排除」「核家族」などに照らして考えれば、中国の家族もまさに「近代家族」としての特徴を示し始めている。しかしもう一方で、中国の家族は、中華人民共和国成立以前の伝統的家父長制規範、社会主義国家体制下の集団主義意識の影響を残し、もう一方では「ポスト近代」の個人主義的価値意識の波にさらされてもいる。

とりわけ、1992年からの市場経済への移行より、職場環境が競争的になるとともに業績主義や個人主義的意識傾向が夫婦関係をも浸食するようになった。家族よりも「生活編成の中心を個人価値の実現におく」、いわゆる「家族の個人化」（長津，2007）傾向もしだいに顕著になっている。今日では、晩婚化、非婚化、婚外同居、ディンクスなどの現象がみられ、中国の家族は「脱近代家族的」な色彩をも帯びるようになってきた。

要するに、短期的なサイクルで繰り返された社会変動と、伝統的な家父長制規範、集団主義意識、西欧的な「近代家族」の愛情規範、そして改革開放後の業績主義や個人主義的意識など、さまざまな価値規範の影響のもとで、中国の家族関係は多様化し揺らいでいる。この多様性を捉えるために、本稿では、落合（1994）のいう「近代家族」の特徴の一つである「家族構成員相互の強い情緒的関係」を切り口に、中年期夫婦の情緒関係を二つの世代間の比較を通して明らかにしていく。

本稿では、戸籍制度による都市と農村の二重構造に配慮して、研究対象を都市居住者に限定する。また、特に社会変動の影響を大きく受ける中年期の異なる二つの世代――新中国の歴史とともにライフコースを歩み、集団主義意識が強調された時代に結婚生活を始めた中年後期世代と、文化大革命[(2)]期前後に生まれ、一人っ子政策に遭遇し、市場経済導入の影響を強く受けた中年前期世代――の差異に焦点を当てて分析を進めていく。

Ⅲ．分析視点

「近代家族とは再生産と感情マネージの両方を同時に行う装置」であり、この理念の下に夫婦間の愛情は規範

化されている（山田，1994）。中国の夫婦関係のありようを社会変動との関連で問う本稿にとって、愛情はどれほど「規範化」されているかは重要なポイントになる。しかし、時代とともに変わってきているが、中国では愛情などを明確に言語化しない伝統があることを考慮して、本稿は愛情などの感情、それに対する認識に注目するとしても、併せて夫婦の会話や一緒の行動などの行為次元にも注目する。中国での規範意識の変化と現実行動との対応関係やズレを世代比較を通して捉え、社会変動との関連で中国の夫婦関係にみられる情緒関係の特徴を探っていく。

Ⅳ．調査対象と調査方法

１．調査対象

調査対象者は北京市に在住する有配偶の中年期男女である。「中年期」の範囲は必ずしもコンセンサスを得られていないものの、本稿では35歳―65歳と幅広く捉え、その内の２つの年齢グループを対象とする。具体的には、35歳―45歳の中年前期世代（以下、Ⅱ世代と呼ぶ）が16人（男性５人、女性11人）、55歳―65歳の中年後期世代（以下、Ⅰ世代と呼ぶ）が10人（男性４人、女性６人）である。調査対象者の選定において、年齢、家族構成、職業などの基本属性がバランスが取れるように配慮しながら、知人に紹介してもらう、居民委員会[(3)]に紹介を依頼するなどの方法を採った。

２．調査方法

１）調査方法：半構造化質問紙に基づくインタビュー調査。できるだけ調査対象者に自由に語ってもらうようにした。内容は①基本属性、②夫婦ともに行う行動及びそれに対する認識、③夫婦の会話を交わす状況及びそれに対する認識、④愛情認識、⑤夫婦間の愛情表現などである。

２）調査実施の状況：調査時期は2007年１月～２月、５月～６月、2008年１月、８月であった。場所は本人の自宅10、勤務先13、喫茶店３であった。全員一対一で、時間は40分～３時間であった。

３）調査後のデータ処理：まずテープ起こしをし、それぞれ事例としてまとめた。分析で使う部分だけを日本語に訳した。

調査対象者の基本属性は表１を参照されたい。ケース番号にWが付いているのは女性で、Mが付いているのは男性である。また、２つ目のアルファベットはⅠ世代を小文字で、Ⅱ世代を大文字で示している。

Ⅴ．事例の分析

１．Ⅰ世代

１）分析

文化大革命の影響を受けつつ結婚生活を始めたⅠ世代の人は、男女関係をタブー視する雰囲気の中で、「愛情」は「ブルジョア的感情」とみなされ、「愛情」など意識しないままに結婚し、また厳しい生活条件の下で30、40年の結婚生活を経てきた。現在では、安定した生活基盤を得るとともに子どもの離家、定年などを経験し、それを契機として家族生活のあり方も変わり、夫婦の関係性が変化した人、変わらない人の両極に分かれている。

Ｗｄさんは、知人の紹介により、理想的な結婚相手とされていた軍人と知り合って互いによく理解しないまま結婚をし、結婚後13年間両地分居をしていた。その間に何回も北京に移動するチャンスがあったが、自分の努力で獲得した幹部の身分が保証されないため、すべて諦めた。最後に幹部の身分で北京に移動したが、一緒に暮らすようになってから夫婦の間に一時期の緊張を経験した。Ｗｂさんもほぼ同じ経験をしてきたと語っている。しかしかれらは、子どもの結婚や離家、定年などをきっかけに夫婦関係の重要性に気づくようになった。この間の経緯につき、Ｗｂさんは次のように語っている。「夫を選んだときは（生活の安定のためなどの）割と現実的な条件を考えた。……その時代だから、夫を頼りにし、求める気持ちはなかったけれど、息子が結婚してからお互いに相手がいなければならないと思うようになったの。この前彼が出張して、ちょっと長かったから、日を数えて過ごしていたわ。若いときはそんなことはなかったのに、……（息子が結婚してから夫は）幼名で私を呼ぶ

ようになった。もともとは「おい」「やあ」とかで、人前では苗字名前そろって呼んでいたのに」。同様にＷｄさんも、娘たちが結婚とともに離家してから夫婦関係が変わったという。夫の会社で出張の打診があった時も、夫を「行かないで」と引き留め、「彼がいないと何となく退屈な気がして。今は彼さえいれば、子どもたちが帰ってくるかどうかも気にしない」という。また、行為次元においても、２人は同じ方向の変化をたどってきた。夫婦両地分居のときはもちろん、一緒に暮らすようになってからも「娯楽と言えるものはなかったし、外へ遊びに行くようなことはなかった」（Wbさん）と夫婦一緒の行動はほとんどなかった。しかし、最近になって夫婦一緒の会話や行動が以前よりずっと多くなった。例えばＷｄさんは、「定年してから、踊りに行きたかった。彼に教えたかったけど、センスがなかったの。それで私も諦めて、２人で散歩することにした」という。Wbさん、Wdさんの２人は認識と行動が相乗効果をもった事例と言えるだろう。

Waさんは両地分居の経験はなかったが、更年期を迎える前に一時期怒りっぽくなっていた。夫はよく理解してくれただけでなく、「セックスの後は、あんたの気持ちが治まるみたいね」と細やかな気配りもしてくれた。それに感動して、「これからの生活には夫の存在が大事だなと思えるように」なった。更年期という女性にとって危機的な移行期は、夫婦関係を見直すチャンスにもなっていることが分かる。夫婦一緒の行動に対して、子供が家を離れたばかりで、これから多くなるだろうと彼女自身が予測した。

一方、他の７人は、若いときはもちろん、現在でも特に強い情緒性を持っていない。Miさん、Mhさん、Weさん、Mjさんさんの４人は、「愛情」という言葉で夫婦関係を語ること自体をまだタブー視していた。夫婦一緒の行動に関して、Ｍｈさんは「週末は１日しかないし、お正月だって３日だけ、洗濯機とかもないので家事だけで１日がなくなる」と経済的にも時間的にも余裕のない時代的な背景を若い時代の夫婦一緒の行動が少ない理由としてあげた。現在は、次女の子どもと一緒に暮らしているため、その世話に忙しく、「（妻と）２人でどこかへ行くことはあまりない。１人が買い物に行ったらもう１人は片付けたりして…」という。

Weさんは、北京にある娘の家に住み込んで孫の世話をしていて、夫と別居してすでに５年になる。彼女の場合、若いときの嫁姑関係の問題が現在の夫婦関係に影を落としており、「（山東省で一人で生活している夫は北京に）来ても長くいられない。彼のお母さんが亡くなってから彼は若いとき自分が悪かったと思うようになったみたい、来たら家事を良くやってくれるけど、会話はあまりない」と夫に親密な感情は抱けないことが分かる。

また、夫の浮気を２回経験したWfさんは、「（愛情とは）本気での、冷静で理性的な心配りだと思う。彼に不満を持ったときでも、病気にかかったり、困ったりすると、一つの家庭に結ばれた２人だと考えれば」サポートすると語り、「愛情」というより同士的な連帯感を強調した。「（もともと共産党幹部である）彼はもったいぶっているだけ……」という語りから夫婦の人生観の違いと、２度の夫の浮気という経験が、会話や一緒の行動を避ける態度の背景にある。

現在大家族の中で主婦的役割をこなすWcさんは、「われわれの時代は、（夫婦は）ただ一緒に生活する、一緒に暮らす、一緒に子どもを育てるだけ」だという。そして彼女は、今までの人生の中で最もいい時期は、生産隊[(6)]で働く際に自分がリーダシップをとって、「（野良仕事をするときに）私が一番前に、100人以上の人が後ろについて……」という場面を語った。家族生活よりも、社会的な役割や責任をまっとうすることに価値をおく集団主義的な価値規範がその背景にはある。現在は自分の父親、姑、夫、未婚の息子と同居しており、昼間は孫の世話をしなければならない彼女は、「（悩みは）言ってもどうにもならないから言わない。自分の時間があれば（夫婦一緒の行動より）休みたい」という。

早期定年して再就職ができなかったMgさんは経済的なプレッシャがあるなか夫婦関係を考える余裕もない状況にある。「（夫婦の関係性）考えて何ができる？離婚する余裕もないし……」という。行為次元において、妻はパートで働いて週末もないほど忙しいため、夫婦一緒に行動する時間さえない。

２）まとめ

以上のことから、Ｉ世代は、結婚生活の初期には男女関係がタブー視され、また集団主義的な価値規範に重きがおかれる社会文化的条件の下で、夫婦の愛情など意識しないままに30、40年の結婚生活を続けてきた。夫の浮気や嫁姑関係などの個人的なライフイベントは、後年に至っても、関係性の修復や再構築をいっそう困難にしている。しかし、そのようなかれらも、妻の更年期、定年、子どもの離家などをきっかけに、時代の風潮として強まっている近代家族の愛情規範の影響を受け、これにライフステージの移行のもたらす変化も作用して、愛情表

現を重要視するようになることもある。一方、祖父母役割、すなわち、競争的な職業環境におかれている子世代の子育て支援の役割が、夫婦２人の生活を楽しむ余裕を奪っている場合もある。かれらの世代は、集団主義的価値規範を強く内面化しているために、脱近代の個人主義的価値意識には違和感を感じる。このことも、夫婦関係の再構築に貢献しているだろう。この世代は、要するに家父長制的な社会規範と近代家族の愛情規範のはざまにおかれているといえよう。

１．Ⅱ世代

１）分析

Ⅱ世代の16人の中で、言葉による愛情表現を重視していたのはWIさんだけだった。「最初は言わなかったよ、ぜんぜん。愛していると言わなきゃ、聞きたいからとよく彼に言った。冗談みたいな雰囲気で彼は『愛してる』と言えるようになってきた」。このように夫婦関係に強い情緒性を求める彼女は行為次元においても、夫婦２人の時間が大切だと認識し、「子どもを親に預けてよく２人で外出する。ショッピングが多いけど」と意識的に一緒に行動している。しかし、このようなWIさんでも、夫婦関係にとって最も重要なのは何かという質問に対しては、夫婦一緒の行動や愛情表現ではなく「お互いに対する思いやり」だと答えた。「どんなときに愛情を感じるか」という質問に対して、「何でも買ってくれるよ。一ヶ月の給料で好きな靴買ってくれたの……疲れてソファーで横になったら食事を作りなさいよとかは絶対言わない。毛布を持ってきてかけてくれる」などと、些細な日常場面を語った。

一方で、愛情の有無と愛情表現を重視しているにもかかわらず、実際にはそれが充たされていないのは、WEさんとMNさんの２人であった。WEさんの夫は職業上の上昇志向が強く、職業上のキャリアアップを求めて転職を繰り返してきた。「私と夫は、観念、物に対する認識がぜんぜん逆で、彼は割と現実的、私はもっと精神面を重視する」と夫との価値観の違いに彼女は「男の家政婦と同じ。生活面では頼りになるが、精神面ではぜんぜん配慮がない」と強い不満を感じている。行為レベルにおいて「彼の仕事についてほとんど分からないので、相談に乗ることもできない。でも、今は意識的に彼に語ってもらうようにしている。彼の仕事は本当にストレスが大きいもので、喋るだけで癒しになると思うの」。しかし実際には、「環境がぜんぜん違うから」あまり会話が成り立たず、子どもの心臓疾患治療のために忙しく、一緒の行動も少ない。

また高校教師のMNさんは、「彼女を愛していない。結婚した当時からいずれは離婚すると思ってた。……愛情が最も重要だと思う」と述べている。彼は両親の不和が反面教師となり、絶対的な愛情規範を内面化している。にもかかわらず、愛のない結婚を急いでしなければならなかった事情により、妻に愛情が感じられないという。それゆえ彼は、夫婦の会話と一緒の行動を避けているのである。

全般的に、言葉で愛情を語ったり、キスや抱擁などの欧米人に一般的な愛情表現をとる人はほとんどいなかった。しかし、夫婦関係における愛情を重要視して、それをかれらなりの様式で表現する人びともいる。

WGさんは、「愛情は夫が家に帰るときの急いでいる足取り……他の人が私を褒めるときの彼の非常に誇りを持って、好きだと訴えているまなざし……彼のタバコの匂いが好き、ソファーで横になったらよくその匂いを嗅ぎにいく」と語った。しかし、強い情緒性をもっているにもかかわらず、自分も夫も仕事に忙しいため夫婦一緒の会話も行動も取れないという。

また夫婦両地分居[(4)]の経験を持っているWKさんは、両地分居の経験は互いに求め合い、頼り合う気持ちを強めており、現在は「（夫は）私のことを大事にしている。誕生日は絶対一緒に祝ってくれる……帰るのが遅くて私がもう寝たら、必ず起こしていろいろ喋る。彼は依存心が非常に強いの。私と娘がいないと何をしたらいいか分からないぐらい」と語った。また、「彼が外へ遊びに行くのが好きで、週末はよく三人でドライブに行く」と夫婦一緒の行動も多いという。

WKさんのほかにも互いに対する依存心を愛情の証として語られる傾向がみられた。MMさんは、「男性は感受性を重視する。（愛情が感じられるのは）お互いに対する依存心かな」と語った。夫婦一緒の行動も当たり前のようだった。小学校教師のWHさんは、「彼は小さいときから苦労してきた。心配してくれる人がいなくて、彼には本当に私が必要だと思う」と述べている。行為レベルにおいては、「われわれは同じ職業じゃない、何でも話すよ」と仕事の状況が夫婦の会話を促進している。夫婦一緒の行動について、妻も夫もつきあいの範囲が狭

いために、おのずと夫婦単位の行動が多くなると述べている。

WHさんと同じようにWFさんも夫婦それぞれの友人や親族とのつきあい関係が、夫婦の情緒性や夫婦一緒の行動の多寡に影響する。WFさん夫婦は、河北省の同じ高校で教師をしていた。そのころは、共有する時間は多かったものの、夫婦だけの行動はあまりなかった。しかし2002年に北京に移住してからは、「夕食の後よく夫婦で一緒に散歩にでかける。（北京では）付き合いが少なくなったの。（故郷は）友達が多かったから」という。それでもWFさんは、「家でもコミュニケーションが取れるので、わざわざ外に行く必要はない」と語り、その行動をあまり重要視してはいない。

しかし、Ⅱ世代においても、夫婦関係の継続に愛情や愛情表現が重要だという規範が共有されているわけではない。

外資系企業で働いているWAさんとWBさんは、夫との会話や一緒の行動が少なく、夫婦の情緒性も求めていない。WBさんは「彼は彼のネットワーク、私も私のネットワーク、お互いにプライバシーを尊重しながら信頼して……子どもが３歳になってからピアノを習わせはじめ、プロになってほしいので、そのときから週末は全部子どもに使った、十数年間全部……」と語った。WAさんも、子どもが１歳になるまでは、夫婦２人で映画を見に行くなど一緒の行動が多かった。しかし今は、「目が子どもにいっちゃったからかな。……夫婦の間はある程度距離をおくべき。１人で行動するのが自由だと思うよ」と、その変化を語っている。親役割の取得と子どもの成長に伴う役割移行により、個人主義的な意識が強まったことが読み取れる。また現代中国における教育熱の高まりが親役割の比重を重くし、夫婦単位の行動をいっそう制約しているようである。

学歴が高く多様な職業経験のあるWDさんは、1995年から、２年間の両地分居を経て同居した経験について、「また一緒になって気づいたけど、２人の関係にはやっぱり変化がある。一人の生活に慣れて独立意識が強くなった」という。現在、自分で会社を経営している夫について「彼を疑ったりしない。別に好きな人ができて（その人の所へ）行きたいなら、行っていいよ。私は自分のために生きているし、あなたも私のために生きる必要がないと彼に言ったことがある」と語った。両地分居の経験が個人を優先する意識を強化する方向に作用している。また彼女は、会社経営主である夫の忙しさと仕事上のストレスが大きいことを夫婦一緒の行動と会話が少ない理由としてあげた。

また看護師のWJさんは、外科医の夫と結婚して７、８年のときに「痒み」[(5)]を経験し、そのころから夫は外での付き合いが多くなった。どう乗り越えたかについては、「彼が熱くも寒くもないなら、こっちも熱くも寒くもない態度で十分。もちろんこの時期に男性は外で浮気をするかもしれないけど、驚くほどのことでもない。いずれは家に戻ってくるよ。時間が長くなると、もう愛情なんかないよ、あれは若い人のことだよ」と答えた。このような状態の下で、彼女は夫よりも息子と一緒に行動することが多いと語っていた。WDさんもWJさんも、過去に遭遇したライフイベントが、その関係性を大きく変容させたといえる。

一方で、MLさん、MOさんの２人は、別の意味で個の意識を強くもっていた。国有企業で働く36歳のMLさんは、「私は伝統的で普通の人間なので、普通に生活している。（職業生活では）競争が激しいよ。（愛情表現など）テレビの中のようなことは現実とあまりにも離れている」と語って、この語りから伝統的な家族意識がうかがえる。しかし、行為次元においては、「週末は、子どもの勉強や稽古事で忙しいけど、日曜日はストレス発散のために一緒に運動に行ったり」と夫婦間の強い情緒性を求めていないが、一緒の行動は少なくない。夫婦間の会話について「仕事のことについて全部じゃないけど、時々お互いにいう。話すこと自体がストレス解消になるから。今は競争が本当に激しいね」と述べており、厳しい職場環境から生じるストレスを、夫婦の会話により癒している様子がうかがえる。

会社を経営している35歳のMOさんは、感情次元について「ロマンチックに愛情を求めるなんて現実的ではないな。われわれの世代は本当に大きなストレスを抱えているから」と述べている。行為レベルにおいては「どこかに行くといつも（夫の両親を含め）５人で、親も子ども楽しい様子を見て幸せっていう感じ」と夫婦だけの行動を重視していない。夫婦の関係性より親や子供を含める家族全体に対する責任感を重視していると伺える。

対照的にMPさんは、「我々は他の夫婦のようなロマンチックな関係じゃない。ただ変哲もなく結婚して子どもを生むだけ」と夫婦関係に特に強い情緒性を期待していない。それでもかれは、「遊ぶのが好きだから、休みさえあればよく（妻と）一緒に外出する」という。近年の中国における経済発展は、個々の世帯における生活水

準の上昇をもたらし、趣味や娯楽を夫婦で楽しむことを可能にしたことが分かる。

２）まとめ

以上の分析から、Ⅱ世代の人は、夫婦のコミュニケーションや愛情を重視する人と、むしろ個人としての生活に重点をおく人に分かれているといえる。前者の人びとは、近代家族の愛情規範を内面化しているが、その愛情表現は欧米に一般的なキスや抱擁、「愛している」といった言葉かけなどではなく、特有な表現より、さりげない日常の行為として現れていた。後者の人びとは、夫婦という単位よりも個人の生活を優先する個人主義的意識を強く内面化している。それは、一方では、脱近代的な個の尊重という規範と、そしてもう一方では、伝統的な家父長制規範と結びついていた。このような諸規範の並存は、この世代の夫婦関係を多様化させる前提条件になっているものと推測される。

行為レベルにおいても同様に、夫婦単位重視と個人重視の両極に分かれる傾向が確認できる。夫婦単位重視の人びとは、一緒の行動より会話を重視しており、仕事に関する話題が会話の中で大きな比重を占めていた。西欧で一般的な、夫婦のデートのような行動は珍しい。西欧の近代的な愛情規範の影響を受けながらも、夫婦の親密性を強める夫婦単位の行動を重視しないのは、学歴主義により強化された近代家族の子ども中心主義、改革開放政策の下で強まった競争的な職場環境が主たる原因だと思われる。このような傾向が強まると、夫婦単位より個人単位の行動がより比重を増してくる。外資系企業に勤務するなど新しい価値意識と触れやすい環境にあり、経済階層が高い人は、個人主義的価値意識をより強く内面化する傾向もみられる。そしてこのことが、夫婦の個人化傾向を強めている傾向もうかがえる。

Ⅵ. 考察

以上は中国都市部の中年期夫婦の愛情に対する認識とそれに関連する行為次元の状況について分析してきた。次は、世代間の比較を通して、社会的変化に伴う規範意識の変化と現実行動との対応関係やズレについて検討し、中国都市部の中年期夫婦関係のあり方を、中国社会の変動とこれに伴って変化する社会意識規範の影響と関連づけつつ考察する。

前の分析から、中年後期世代は全体的に規範意識と現実行動と対応関係にあることがわかる。結婚初期には彼らは愛情を重視することはなかった。また、行為レベルおいても夫婦関係を重要視することができなかった。その背景には、当時の低い経済レベル、残存する家父長制規範、社会主義国家体制の下で強調された集団意識などの要因がある。その一方、中年期のステージ移行とともに、夫婦の会話や一緒の行動が多いことに加え、愛情を重視する意識が強いという意味で一致するように移った人もいる。このことは、子育てと競争的な職場環境からすでに離脱した、あるいは離脱しつつあるというライフステージ効果と「近代家族」の愛情規範との総合的効果を表している。つまり、中年後期世代の人は「前近代家族」から「近代家族」への移行期に夫婦関係の後半期における再構築を求められることになった。その際、社会主義国家体制の下で強調された集団主義意識の影響を強く受けていた人は、近代家族規範の受容がある程度制約されることになった。

中年後期世代と対照的に、中年前期世代の夫婦関係は多様性を呈している。夫婦の会話や一緒の行動が多いことに加え、愛情を重視する意識が強いという意味で認識と行動が一致している夫婦は、量的に少なくない。彼らは愛情規範の影響をより強く受け、「強い情緒関係」を持っている意味で「近代家族」の色彩を強く帯びている。一方、認識でも行動でも夫婦関係を重要視していない夫婦も、インタビュー対象者の中で一定の比率を占めている。そこには市場経済への移行により強められた業績や個人の自由を重視する個人主義的価値意識という「脱近代的」な意志や規範の影響が読み取れる一方、「前近代的」な家父長制規範との総合効果も見られた。さらに、「強い情緒性」を求めるという「近代的」な愛情規範を内面化したにもかかわらず、配偶者との間に愛情を持てなかったケースもあった。要するに、中年後期世代の人は、中年前期世代のライフコースに沿って異なる規範に遭遇する状況と違って、中年前期世代は夫婦関係に関する多様なる規範が共存する中で、個々人のライフコース的な背景によって選択的に違う規範を内面化するか、総合的な規範を内面化するのが特徴であるといえる。

一方、中年後期世代の全部対応関係にある状況と違って、中年前期世代に認識と行動がずれているケースもあった。認識では夫婦の情緒性を重視しているわけではないが、夫婦一緒の行動が多いMPさんとMLさんは、

経済の発展に伴って生活に余裕ができ、趣味や娯楽を夫婦で楽しむことを可能にしたことが夫婦の行動を促進したことと、「前近代的」な家父長制規範により夫婦関係への愛情欲求が抑制されたことの総合的な効果である。

また、夫婦の情緒性を重視しているにもかかわらず、夫婦一緒の行動が多くない意味で認識と行動がずれている状況にあるケースの状況要因に違うものが見られた。WGさんは市場経済の導入に伴って競争が激しくなった職場環境と「近代家族」の愛情規範との競合的な効果である。一方、WEさんは、愛情規範の影響を強く受けて夫婦の情緒性を重視しているにもかかわらず、夫との認識のズレにより会話が十分に成り立たないことがその原因である。

以上をまとめれば、中国では激しい社会変動とこれに伴って変化する社会意識規範の影響で、家族のあり方にも「前近代的」「近代的」「脱近代的」な要素が並存し、それが夫婦関係の多様化をもたらした。世代間の比較を通して、上の世代は「前近代的」「近代的」な色彩を強く帯びているに対して、より若い世代には「近代的」「脱近代的」的な色彩を強く帯びていると同時に、「前近代的」な影響が完全になくなったわけではなく、「脱近代的」な特徴と結びついて新しい「個」を重視する形になっていることがわかった。

本研究は中国北京一市で行われた調査結果のみに依拠していること、また調査対象者はほぼ全員が中間階層に属する人であるという点で、この知見をどこまで一般化できるかはなお検討の余地がある。また、夫婦ペアでのインタビューができなかったことは分析の深みに影響を与えていると思われる。今後はこの点に配慮しながら調査を継続し、激しい社会変動の渦中にある中国都市部の夫婦関係の変動と多様性を追い続けていきたい。

【注】

（1）未嫁従父、即嫁従夫、夫死随子；婦徳、婦言、婦容、婦功。

（2）1966-1976年の十年間。

（3）都市の大衆自治管理組織で、一番末端の行政組織である。

（4）夫婦はそれぞれ違う都市で離れて生活することを指す。80年代中期までは戸籍などの関係でやむを得ずそうする夫婦がほとんどである。近年勉強や職業のために自主的に一時期離れて生活する夫婦が増えた。

（5）夫婦間の倦怠期という意味でよく使われている俗語。

（6）人民公社を構成する基本経営単位。

【文献】

Blood R.O., 1967, Love Match and Arranged Marriage:A Tokyo-Detroit Comparison（田村健二監訳，1978,『現代の結婚日米の比較』，培風館）.

望月嵩，1997,「家族の内部構造」森岡清美・望月嵩共著『新しい家族社会学』，培風館.

長津美代子，2007,『中年期における夫婦関係の研究：個人化・個別化・統合の視点から』，日本評論社.

落合恵美子，1994,『21世紀家族へ：家族の戦後体制の見かた・超えかた』，ゆうひかく選書，94-110.

潘允康，2002,《社会变迁中的家庭》，天津社会科学院出版社.

沙吉才，1995,《当代中国妇女家庭地位研究》，天津人民出版社.

杉岡直人，1996,「家族規範の変容」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編著『今家族に何が起こっているのか』，ミネルヴァ書房

首藤明和・落合恵美子・小林一穂編著，2008,『分岐する現代中国家族』，明石書店

陶春芳，1993,《中国妇女社会地位状况》，中国妇女出版社.

若林敬子，1996,「家族規範の変容」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編著『今家族に何が起こっているのか』，ミネルヴァ書房

王金玲，2005,《女性社会学》，高等教育出版社，31-34.

徐安琪，1998,「夫妻伙伴关系」《中国人口科学》1998（4）.

徐安琪，2004,「女性的家务贡献和家庭地位——兼评上海“围裙丈夫”、“妻管严”的定性误导」孟宪范主编《转型社会中的中国妇女》中国社会科学出版社，225-270.

山田昌弘，1994,『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス——』，新曜社

杨善华，2006,《家庭社会学》，高等教育出版社.

郑丹丹，2004,《中国城市家庭夫妻权力研究》，华中科技大学出版社.

表１　調査対象者基本属性一覧表

	ケース	年齢	現職	結婚年数	配偶者年齢	配偶者現職	子供年齢	家族構成
Ⅱ世代	WA	38歳	外資企業	７年	41歳	外資企業	４歳娘	夫、娘、夫の両親
	WB	45歳	外資企業	19年	47歳	自分で会社経営	14歳娘	夫、娘
	WC	45歳	外資企業	21年	45歳	国有企業	20歳娘	夫、夫の両親、娘
	WD	43歳	公務員	17年	46歳	自分で会社経営	14歳娘	夫、14歳の娘
	WE	39歳	公務員	10年	41歳	株式銀行	８歳娘	夫、娘、夫の母親
	WF	41歳	高校教師	17年	44歳	公務員	15歳息子	夫、息子
	WG	35歳	保険会社	10年	37歳	軍人	９歳娘	夫、娘
	WH	37歳	小学校教師	13年	38歳	小学校教師	12歳娘	夫、娘
	WI	43歳	小学校教師	17年	40歳	国有企業	14歳娘	夫、娘
	WJ	43歳	学校保健所	20年	48歳	医者	19歳息子	夫、息子
	WK	35歳	修士在学	10年	35歳	軍隊	８歳娘	夫、娘
	ML	36歳	国有企業	10年	34歳	国家公務員	７歳息子	妻、息子、夫の母親
	MM	40歳	会社員	16年	39歳	ヘッドハンター	９歳娘	妻、娘
	MN	38歳	中学校教師	17年	34歳	短期大学教師	16歳娘	妻、娘
	MO	35歳	会社経営	８年	35歳	法律事務所	６歳娘	妻、娘、夫の両親
	MP	41歳	公務員	10年	39歳	専業主婦	９歳息子	妻、息子、妻の母親
Ⅰ世代	Wa	55歳	学校事務職	27年	58歳	研究所	23歳息子	夫、息子
	Wb	57歳	公務員定年	30年	58歳	公務員	29歳息子	夫
	Wc	59歳	集団所有企業定年	37年	61歳	国有企業定年	33歳と31歳息子	夫、妻父親、夫母親、次男
	Wd	60歳	国有企業定年	32年	59歳	軍隊定年	31歳と27歳娘	夫
	We	60歳	公務員定年	36年	61歳	公務員定年	34歳息子32歳娘	娘（夫は両地分居）、孫
	Wf	61歳	専門学校教師定年	35年	65歳	国有企業管理層定年	34歳息子	夫、息子
	Mg	56歳	集団所有企業早期定年	29年	55歳	パート	24歳娘	妻、娘
	Mh	64歳	研究所所属企業定年	37年	62歳	小学校教師定年	36歳と34歳娘	妻、長女、次女の子供
	Mi	65歳	国有企業定年	42年	66歳	国有企業定年	41歳息子40歳と38歳娘	妻
	Mj	65歳	国有企業定年	36年	64歳	中学校教師定年	35歳娘33歳息子	妻